

固有名詞の内包について

両 角 克 夫

Ⅰ 実在とその名前

我々は新たな事物や事象を経験するたびに、それに名前を与え、記憶にとどめ、他人への伝達の媒介たらしめようとする。然し、名前とその referent との関係は、発生的に観る場合 onomatopoeia などを除く限り偶然的で、恣意的である。ある音声又は文字とある事象との結合が、ある社会に於て convention となり、更に意識的積極的約束として強制力を持つ場合に（例えば辞典の編纂など）はじめてその音声や文字は流通性を獲得し「語」となる。このような語の増大によつて、事物の時間的経過やその構造、事物と事物との関係、事物の属性などが言語に置きかえられ、物語りとなり記述となり又思考を通じての判断にもとづく命題即ち「文」となる。

夫々の国語は、独自の語彙と統語法を有しながらも、言語である限り上述の如き言語活動と呼ばれる人類共通の底の上に成立している。

我々は多様な経験を通じて成長する。経験とは、主体と環境としての事物との出会いであり、これは厳密に云つて1回限りで全く個別的なものである。同一の経験は繰返すことは出来ない。主体も環境も時の流れの中に在つて変成している。然し人間はかかる chaos としての経験的現象界の中に生きながら、現象の背後に時間を超えて不変であり、場所的区別を超えて遍在的な本質を把握しようとする。かかる欲求と努力は homo sapiens の運命でありどうしようもないものであろう。ここに概念的認識が要求され、認識活動に於ける言語の重要性が明白となる。

概念とは事物の本質を捉えているものであるか、又は事物の accidental attributes と呼ばれるものを捨象して、essential attributes だけを抽象綜合してそれに与えられた便宜上の名目に過ぎないものであろうか。例えば“apple”なるものは実在するであろうか。“apple”の本質が各人の頭の中にあつてはじめて、this apple, that apple の如き個々の経験的認識や識別が可能となるのか、或は this apple, that apple の如き個々の経験的事実が存在してはじめて“apple”なる概念の本質的認識が可能となるのか。たしかに実在するものは夫々独自の apple であつて、無数と云つてもよい。全く同一の apple は唯一つである。これに名前を与える場合、厳密に云えば、夫々の apple に夫々別個の名前を与えなくてはならない筈である。でなければ、name—referent の関係は一對一の対応をなすことが出来ない。然しこれは不可能であり、不必要でもある。というのは存在する個体は無限であり、人間は無限に名前を創り出すことは不可能だからである。又無限に存在する個体には相違性と同時に類似性があり、類的、種的分類を可能とする。“apple”は或る実在する唯一の個体につけられた名前ではなく、“apples”と呼ばれる或る類似性を基準として分類され概括された群れを代表するものであり、その内包は、その群れにふくまれ、個体に内在し共有される attributes なのである。その内包は explicit と implicit の両面を有する。換言すれば“apple”なる概念の

内包は客観的に限定された面を有すると同時に主観的で無限定の面があり、この二面は歴史的、場所的に交渉し、互に影響を与え相互の変転をもたらすのである。即ち“apple”なる語が、我々の意識の中に喚起する image 又は内包は、時と場合により、又各言語主体によつて共通性と同時に夫々異なる点が存するのであり、内包の増減とずれがあるのを認めなくてはならぬ。科学論文の如き場合、用いられる概念は客観的にその外延と内包を限定されるべきであるが、文学に於ける言語はむしろその語の内包の限定を破つて増大深化せしめなくてはならぬ。だから詩作品などに於ける語の解釈が夫々の reader によつて異つて来るのは当然のことであろう。これは、詩作品に於ては語はその convention としての約束的な限定を越えて“物その物”とも云うべき存在の根源に接近し、作者の人間の意識的支配から独立していくからである。換言するならば、一つ概念記号としての語は、詩作品に於ては、その類型的概念的認識としての種と類の枠を越えて、実在としての個の“objective correlative”とならなくてはならぬ。

日常的な言語は、論理的科学的言語と、詩的言語との中間的混合であり、language と speech, langue と parole の相接する領域であり、従つて語の内包の変転していく歴史的場面なのである。

このように考えて来る時、語が個々の実在からはなれた単なる名目にすぎないものか、又は概念記号としての語があつてこそ個々の事物の普遍的認識が可能になるのか、と云つた問題はある程度解決されたものと云えよう。それは言語が操作的、機能的な云わば道具としての面を持つと同時に、外的内的実在の“objective correlative”としての面、即ち実在と結合し分離出来ない存在としての面を持つということである。道具としての言語は改良し進歩させることが可能であつても、内的外的実在、特にそれが価値的なものを含む場合、それと結合し一体となつた言語は、他に代置出来ない独自の内包を有するものであつて、改良も進歩もあり得ない“物”となつていたのである。これは高度に洗練され、成功した言語芸術としての文学作品に於て観られるものであり、所謂“mot propre”とか、“the one word for the one thing”などと呼ばれるところのものである。これは image となつた言語、実在に結びついた概念、普遍と個物との結合体としての記号、などと呼ばれてもよい。

II 普通名詞と固有名詞

名詞とは物に附される名前である。この“物”は、普通 substance と呼ばれる。substance とは変転する現象の根柢にあつて、恒常的で自己同一性をなうものを意味し、それ自ら存在し他に附属したり依存するものではない。これは思考や論理、即ち文の基礎となるものであり、subject となるところのものである。物は同時性に於て様々な属性を有し、又時間に於て運動し、変転していく。又物は他の物と静的な諸関係を結んで場を形成し、又互に作用し合う。このような属性、関係、作用などは物ではなく事柄であり、現象でもある。文に於ては普通附加語又は述語として働く。事柄は手にとつて眺めることの出来ないものであつて、これを対象概念とし、主語として、思考の対象とする場合には、思考過程に於ける観念化の操作を必要とするのであつて、ここに所謂抽象名詞が誕生する。

我々の直観や表象は個体的であつて、個体の全体性とかかわりをもつものであり、従つて individualization の傾向をもつ。これに対して、我々の反省的思惟は、個体的のものを分析

し、個々のものを比較し、そこに共通な属性を見出し、個々のものを共通な属性に於てまとめ分類し整理し、新たなる個体的体験の類的識別を容易ならしめんとする。これは generalization の傾向をもつ。

我々の認識活動は、直観と思惟との間を反復しているものであり、換言すれば主概念と賓概念、対象概念と属性概念、全体と部分、個と普遍の間を往来し、その二つの柱の形成する場を動き回っているのである。然しこの二つの柱は相対的のものであつて、絶対的のものではないが、概念を分類する場合一つの基準を提供するものであつて、直観から得られる概念を具象概念、反省的分析的思惟から得られる概念を抽象的概念と呼ぶ。snow は具象概念であり、whiteness は抽象概念である。然し snow も whiteness も概念である限り、思考によつて判断され一般化の過程に於て形成されたものである。ただその一般化、抽象化の度合いが異なるのである。従つて主概念となり得る対象概念の言語記号化を名詞と呼ぶならば名詞を分類する場合に具象名詞と抽象名詞の二つの群れに分けることは便利である。H. Sweet などの名詞の分類を観ても、

$$\left. \begin{array}{l} \text{concrete} \\ \text{abstract} \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{common nouns} \\ \text{proper names} \end{array}$$

となつている (A New English Grammar Part I p. 54)。

この分類によれば common nouns も proper names もともに concrete nouns の中に入れているが、concrete とは growing together の意味であり、liquid に対して solid の意をもつ。具象的なものは直観的表象に於て与えられるものであり、こうしたものに名前を与える場合の過程は直接的である。つまり name の referent の實在の性質が solid であつて、その name によつて喚起される image は個体的、実質的である。この場合の referent は abstract nouns の場合の如く観念的に作り出されたものではない。それはあらかじめ外から与えられたものであり、我々の思考以前に實在する他者、即ち実物なのである。

このような性質を有する concrete nouns の様相を更に探つてみると、我々が他者としての referents に命名する場合、二つの方向又は志向に気づくのである。それは物又はそれとの出会いによつて得られる経験の唯一性を表象又は表現し伝達せんとする場合と、無限に多様な物や経験を整理分類して幾つかの群に分け、その群に一つの名前を与える場合である。前者は、ある個体を他から区別せんとする志向にもとづく。“the eldest of all” の如き表現は、ある集合の共通な属性を抽出し、その量的比較による相対的の唯一性であつて、絶対的に質的に唯一性を表現せんとする proper name とは異なる。common name (以後 noun の代りに name を用う) に於ける common とは、shared together の意であり、ある属性の共有を意味する。common name としての “a man” は man なる概念の内包を共有する集合を前提とし、その群れの代表として表象される個体である。“the wisest man” の場合も、人間集合の共通の属性を wisdom にしぼり、それにもとづく比較考察から生れた個体にすぎない。

これに対して、Smith, Dickens 等の family name は、一つの群れに与えられた name であるが、これはある共通な属性にもとづいてあとから分類されたものではなく、最初から他の families から区別し、その集合の唯一性を質的に限定している。family name としての Smith は、発生的には職業と関係があつたとしても、その意味を喪失し、意味内容からは全く独立し、他の families から区別するための音又は文字による記号としての機能を課せ

られたものである。従つて family name としての Smith は記号ではあるが概念ではなく referent との結びつきは思考を媒介としない直接的のものであり、その referent の性質や属性を規定せずに、referent そのものを表示している。我々はその referent との接触によつて Smith に対して様々な属性を附加することは自由であるが、Smith はどこまでもその存在に対して与えられた記号であつて、その存在の attributes に対しては無規定である。従つてこの場合 Smith は、外延をある個体又は群れに限定する役目を果すのみであつて、内包に対しては無規定である。無規定と云つても、他の個体又は集合から区別せんとする場合は、そこに何らかの共通の属性に基づいて区別しているとも云える。Smith が family name として用いられる場合は、Smith の内包として family を前提としているとも云える。然し Smith は本来ある referent と直結したものであつて、“a family whose name is Smith” を意味するものではない。

ここで、referent とそれと与えられた name とを一応区別して考えなくてはならぬ。referent は人間の外にある他者であり、name は人間が人為的後天的に作り出し附加したものである。name は referent の記号としての function を果すのが本来的である。referent は夫々唯一独自のものであり、同一のものは他にはあり得ない。同一物でも時間の中で変転していく。厳密に考えればたしかに同一性というものはうたがわしい。然し、John と呼ばれる人物は、幼年時、青年時、老年時を通じて、John と呼ばれるのであり、同一人物とされるのである。過去の行為に対して人間は責任をもたなくてはならぬ。それは人格の統一性、(identity) が前提となつているからである。不易と流行という認識の方法は人間の認識の成立のために不可欠のものと思われる。

referent 又は“物”の属性は、普遍的、即ち抽象的な観念で表現されるのであるが、本来的な (proper) referent そのものに附された記号 (name) が固有名なのである。proper name としての Smith は、その referent の唯一性を表示せんとしたものであり、Smith なる referent が如何なる属性によつて、如何なる種又は類に属するものかなどを説明しない。それは Smith なる記号の内包するところではない。context などによつて Smith と名づけられた referent が人間であるか、犬であるか、或は土地であるか、などが判明するが、それは Smith なる記号の内包を形成するものではない。つまり、referent のもつ属性や特質は Smith 以外の言葉で表現される筈のものである。“Smith”はその referent の分析的属性を伝達しようとするものでない。ここに、referent の属性を伝達せんとする name と、referent そのもの (its own) を一対一の対応に於て指示する name が考えられるのであり、referent への知識の増大が直ちに Smith なる記号の内包として流通するものではない。Smith は、referent そのもの以外を伝達せんとはしないものである。

III Proper Names と概念

proper names は個体表象と結びついた音声又は文字であつて、判断の過程を経たものではない。proper name としての Smith は、唯或る referent の記号というだけで、その referent が人であるか、土地であるか、河川であるかさ意味していない。Smith が或る人物であるとすればあとになつて referent に対する知識がつけ加わつたものにすぎない。proper name が name である限り、その背後に referent としての存在を表象しているが proper name は referent

を説明したりその属性を物語るものではない。従つて伝達を助けるために common names を附加してその attributes を説明しなくてはならぬ。Mr. Smith, Mrs. Smith の如きである。

概念を intension の多少によつて分類すれば individual concept と general concept, extension の多少によつて分類すれば simple concept と complex concept になる。individual (single) concept は extension の最少に達したものであるから, the highest mountain, the sun, the moon etc. の如きものを考えることが出来るが, 固有名詞をこれに入れるのはどうであろうか。たしかに proper name は individual and singular であるが concept であり得るか。

概念とは、表象や直観に反省としての思考的判断が加えられ、その referent としての個体の attributes が自覚された時にはじめて得られるものである。この自覚が、概念の内包であり意味である。

proper names はある referent を denote するだけで referent の attributes を connote しない。referent そのものは無限の attributes をもっているが、proper name は一つの記号であつて referent の attributes を直接に伝達するものではない。Fuji と云う proper name は Mr. Fuji, Mt. Fuji, River Fuji etc. であつて、Fuji は一定の音響を表すのみである。Mt. Fuji の referent のもつ独自の形や高さが Mt. Fuji に附加されて用いられる場合は common name に移行しているのである。e. g. Mt. Daisen is the Fuji of Hōki. 逆に Ochanomizu College, Hitotsubasi College などに於ける Ochanomizu, Hitotsubasi などは発生的には common name が土地の固有名に転化し、更に college の proper name になつた時、土地の固有名からも全く独立し、他所に移転した現今でもその名称を用いており、Ochanomizu, Hitotsubasi 等の names はその本来の内包を喪失し、完全な proper names に転化したのである。

概念のもつ内包は、essential attributes と individual (accidental) attributes 両方を考えることが出来るが、attributes は思考判断の必ず加つたものであり、それは様々な経験に於て何等かの点で共通な性質であり、この意味で抽象又は捨象の作用を経たものである。

the highest mountain in Japan に於ける the highest は唯一性を意味するが、これは height なる attribute の量的形態の一つであり、この attribute を抽象し、これを共通な底として他との相対的比較によつて得られたものである。従つて他の国語への翻訳が可能である。日本一高い山, la montagne la plus haute au Japon, などの如くであり、これは equivalents として夫々通用する。然し同一の referent に対して与えられる "Fuji" の如き proper name は概念としての内包即ち attribute について無規定であるから、他の国語に移すための共通の底がなく、質的独一性を保持する。例えば proper name としての山田はどこまでも Yamada であつて、Mountain Rice-Field と翻訳することは出来ない。従つて Fuji, Yamada, などの proper names は概念とは云えない。

proper names は、その referent の有する attributes を内包とする概念の記号、即ち common names に転化する。例えば

He is an Edison. (a great inventor)

然し、

He is Edison. に於ては proper name としての Edison は、he の complement であり、その一つの属性を規定するだけである。即ち His name is Edison. の意味である。

proper names は、文の主語となり、補語となり、目的となることが出来、又印欧語に於

ては語尾変化をもつ点からも、文法範疇では名詞の一種と考へ得るのであるが、概念以前のものであり、referent と直結する記号ではあるが、概念を媒介として referent に結びつく common names とは異なる。proper names は概念記号ではない。図示すれば、referent—proper name に対して、referent—concept—common name の如き結合の方式をとる。

IV J. S. Mill と Jespersen

J. S. Mill は、

“John, or London, or England, are names which signify a subject only. …… Proper names are not connotative: they denote the individuals who are called by them; but they do not indicate or imply any attributes as belonging to those individuals. …… the name, once given, is independent of the reason. ……” (A System of Logic, pp. 19—20: Longmans 1925)

これに対して、Jespersen は、

“In Mill’s terminology, but in absolute contrast to his view, I should venture to say that proper names (as actually used) “connote” the greatest number of attributes”. (The philosophy of Grammar p. 66) 又、Jespersen は、proper names も common names も、その referent たる人物や事物に対する知識の増加につれて意味と内包を増加していくと云う。又 context を重視する。もし proper names が多くの attributes を内包しないとすれば、デンマークの少女の、《Il est un Thorvaldsen.》とか、Oscar Wilde の “Every great man nowadays has his disciples, and it is always Judas who writes the biography.” の如き proper names が common names に移行する言語現象を説明出来ないと云う。proper names と common names の相違は程度の差にすぎぬとする。更に “The philosophy of Grammar” から引用すると、Linguistically it is utterly impossible to draw a sharp line of demarcation between proper names and common names. We have seen transitions from the former to the latter, but the opposite transition is equally frequent.

……………

The more special or specific the thing denoted is, the more probable is it that the name is chosen arbitrarily, and so much the more does it approach to, or become, a proper name.

従つて、the difference being one of degree rather than that of kind. となる。

Jespersen の先輩 H. Sweet も、

It is incorrect to say that proper names are devoid of meaning. On the contrary, they have more meaning than common words through being more highly specialized. The mistake has risen from confusing unmeaning with unconnected…… all proper names have risen from limiting the application of some common word to one particular object. (A New English Grammar I, p. 59)

以上に見られる如き proper names の内包の有無に関する、Mill と Sweet—Jespersen の如き意見の対立はどこから来るか。

私見としては、proper names と common names の相違はその使用目的と機能によつて識

別すべきである。London の Green Park, New York の Central Park の如く common names が proper names に移行し, a Thorvaldsen の如く proper から common への移行の現象は必ずしも proper names と common names の相違が程度の差であることの説明にはならない。proper names の目的と機能は referent を他から区別せんとするものであつて, その属性を説明せんとするものではない。

He is a Thorvaldsen. の a Thorvaldsen の機能は common name であり, その属性 sculptor を内包し意味する。然し He is Thorvaldsen. に於ては Thorvaldsen は何の属性も内包せず, ただ He is called Thorvaldsen. であつて, Thorvaldsen は概念ではなく, ある referent に対する視覚と聴覚にもとづく記号以上のものではない。Thorvaldsen なる記号の使用目的とその機能は, 上にあげた二つの文に於ては質的に異なるのであつて程度の差に還元出来ない。Newcastle は地名となつた時, 発生時に於ける a new castle の内包を全く喪失して proper name となつたのである。

Proper name はその referent を単に指示する記号であつて referent に何の説明も与えない。その referent の内包は無限定のまま放置されるのであつて, referent に対する知識や経験はその proper name に内容を附加していくかも知れないが, それは全く派生的副次的現象であつて proper name にとつて本質的機能ではなく, 偶然的である。

proper name は實在の又は虚構の referent に附された記号であり, referent と proper name との関係は全く社会的言語的約束から自由であり, arbitrary である。proper name はたしかに referent を他から区別し, その外延を唯一のものに限定する機能を有するが, (III) に於て考察した如く, 概念とは云い難いものであるから, 文法範疇に於ける名詞の中でも特殊なものである。つまり word というよりもむしろ記号なのである。外延的限定から考えても, the highest tree, this tree, that tree, の如き時間, 空間, 量の如き共通な場面に於ける相対的比較的な唯一性を示すものではなく, 絶対的なものであり, 比較による限定ではない。

He is John.

に於て John が proper name とすれば, He is called John. の意味であつて, たしかに John は文法的形式的には “he” の補語であるが, “he” の述語としての内容は極めて貧しい。John は約束された普遍的な内容を有せず述語として主語を説明する概念としての機能を有たない。形式論理学などに於て, proper name を individual and complex concept の極限として捉え, これに無限に豊かな内包を与えることは問題である。むしろ, 繰返して述べた如く, proper name は concept 以前の記号であり, 従つて, proper names は内包を有しないと, 無限の内包を有するとかいつて, 論ずること自身が無理である。

又實在又は虚構の referent はその個体に於て, 又その属性に於て無限であり, これに比して words は数とその内包に於て有限である。無限定な referent の海を限定し認識にもたらしめようとする志向こそ, 概念と言語を生み出したのである。

man なる word or concept はその referent の或る限定の試みであつて, referent そのものは, 思想的反省的判断によつて形成された concept の記号としての man を無限に超えている。referent に対する思想的判断を経ずに, 単に呼び名として, 記号として referent に結びつく proper name は, 概念の記号ではなく, 従つて他の国語に移す場合, common name の如く共通な概念を媒介として異つた音声の体系に転ずることは出来ない。厳密に云えば, 音のみでなくその spelling さえ保存されなくてはならぬ。

以上の如く考えて来るならば Mill と Sweet-Jespersen の proper name の内包に関する意見の対立は、どちらが正しく、どちらが誤りであると言うが如きものではなく、Mill は proper name の本来の機能について正しく考察し、common names の機能と厳しく識別せんとしたものであり、Sweet-Jespersen は言語に於ける所謂 proper names と呼ばれる words の実際上の用例を基にして、common names との連続性、その相対性を示さんとしたものである。その意味で Mill と Sweet-Jespersen の両見解は相比較して読むべきものであり、又共に興味深いものであるが、proper と common は相異なる意味方向を有するものであり、これを相対的なものに解消し切ることは出来ない。ただ実際の場面に於てはそれらの機能は互に接触し互に転換し合うのである。

唯、proper name は内包を有しないと、無限の内包を有するとか云うのは困るのであつて、proper name は概念記号となつておらず、従つて connotation に関しては無規定なのである。referent の属性をそのままその記号としての proper name に持込むことは、referent と name、物自体と概念的悟性的記号体系としての言語の世界を混同するものである。

V 固有名詞の外延の拡大と普通名詞への転換

Jespersen は “The Philosophy of Grammar” p.69に於て、We understand sentences like the following, which are very hard to account for under the assumption that proper names are strictly non-connotative. とのべ

He felt convinced that Jonas was again the Jonas he had known a week ago. and not the Jonas of the intervening time. (1)

Anna was astounded by the contrast between the Titus of Sunday and the Titus of Monday. (2)

などの例をあげている。

ある referent は共時的には唯一のものであり proper name はその独一性を指示する記号でもあるが、referent が時間に於て変化していく場合、そのフィルムのコマを集め同時性の地平に並べて見ると、その referent は独一性を失つて、複数となつて出現する。例(1)に於ける Jonas の referent は三つあり、例(2)に於ける Titus は二つである。これは厳密に云つて、proper name が referent との一对一の対応を喪失した場合であり、Jonas then, と Jonas a week ago, と Jonas of the intervening time, とはその modifier によつて夫々内包の時間的限定を得ると同時に Jonas は種概念に転換したのである。これはもはや proper name ではない。this Jonas と that Jonas との比較が可能になるためには、this Jonas と that Jonas の共通な属性と異なる属性が暗示されているのであり、Jonas は common name として抽象化され種化されている。本来的な proper name を用いるならば、this Jonas をある proper name で、that Jonas を全く別個の proper name で記号すべきである。従つて(1)(2)の如き例によつて、proper name が内包を有すると結論するわけにはいかない。Jonas, Titus は

既に proper name として機能を喪つているからである。

Jonas then, Jonas of the intervening time, etc. に於ける Jonas は文法的取扱いに於ても common noun として扱われている。この Jonas は夫々異なる referent に対応するものであり、その外延は小さく、内包的限定は未だ社会性を得て dictionary にのる程度になつていないとしても、proper→common 即ち individual→special への転換を終つたものである。

VI Pseudo-Proper Names について

普通の英文法書では、proper nouns の項に、人名、地名の他に、Venus, Mars, などの天体名、Monday, January, Christmas などの曜日、月、祭日の名前、Spring, Nature, Time, Necessity などの大文字で始る擬人化された common nouns や abstract nouns をあげている。

Venus や Mars は、天体の名前であると同時に神の名前でもある。これは異なる referents に対して同じ名前がつけられた例であるが、夫々の referent と一対一の対応をなしている。Fuji が、山、川、人名等に与えられる場合に近い。Venus は、何ら属性を示さない。星であることすら“Venus”そのものは示さない。従つて概念となつていない。なる程“金星”と日本語に移されるが、これは概念を通じてのものではなく、同一の山をスイスでは Matterhorn, イタリアでは Cervino と呼ぶに等しい。従つて天体名としての Venus は proper name である。然し何故 the earth, the sun, などの天体が完全な固有名を持たないのか。これは恐らく歴史的な事情によるものであろう。それらはたしかに多くの属性が知られ、その属性が強ク意識面に浮ぶのであり、ここに proper → common の転換を感じさせるものがある。

Monday 等は、Mondays と複数化が可能であり、七日に一回ずつめぐつて来る day であるから完全な proper name ではない。又各週の二日目と云う属性をもつている。spring などに等しいものである。大文字で始つて、proper name らしい姿をとつているが common name としてよい。然し、Robinson Crusoe が、その従者に、“Friday”と命名した時の Friday はその意味の connection をはなれた完全なる proper name なのである。

Nature, Necessity 等大文字で始まる擬人化の名詞は、その属性をそのまま保存しているのであつて、proper name ではない。

Father, Mother の如きものが、大文字で始まる時、proper name であろうか。たしかにある家庭に於ける Father は一人であり、名称との一対一の関係は保持される。然し Father はその属性が意識されている場合 proper name ではない。ただ、幼児がその意味を知らず、ある人物を Father と呼ぶ時、proper name の性格をもつと云えよう。幼児は、成長し、他の家庭でも Father と呼ばれる人物の存在することを知る時驚くのであり、その時はじめて Father の一般的属性、即ち意味内容を意識し、my father なる表現を用いるようになるのである。

次に the Bible や God について一考したい。the Bible は the Book の意味であつて、発生的には全く common noun である。大文字で始められるのは、unique なる意味の限定が強いからであり、“the”が附されるのは未だ common noun としての根跡をとどめている。然し、ヨーロッパ人が Bible と呼ぶ場合その意識の中で、“book”と云う意味が忘れられ、唯一の referent の名称であつて他の名称に置きかえられないものとなる時、Bible は

proper name となるのである。

God についても同様なことが云える。Venus, Mars などの如く, polytheism に於ける gods につけられる名前は完全なる proper names であり, その referents は神話的のものであつても一対一の対応をなし, “Venus” は美の女神の単なる呼び名, 記号であつて概念ではなく属性を指示しない。従つて他の言語に翻訳する時も“ヴィナス”とその原音型態をとどめなくてはならない。これに対して, deus は common noun である。theos, god 等々と転換することが可能である。然し monotheism の場合どうなるか。god の referent は唯一である。“bible” の referent が唯一である場合に等しい。

Hebraism の the god は Yahweh, Elohim などと呼ばれる。Yahweh は存在の根源を意味しており (cf. Exodus III-13) 従つて connected であつて proper name とは云えないが, 古代 Israelites によつて他の polytheism の神々から自分達の神を区別するために Yahweh が用いられた場合, これはやはり proper name であり, その概念的內包の意味は意識されなかつたのである。monotheism の意識が確立された後 Elohim, Adonai 等が Yahweh に代るが, これらはやはり概念としてではなく proper name の機能を果すものであり, 子供が Father! と呼ぶ時の名称と心理に近いものであつた。本質的には同一の monotheism であるが, the Old Testament から the New Testament への神観の転換は民族から人類への展開であつた。従つて Yahweh や Elohim の名は, Israelites 以外の所謂 Gentiles に於ては, そのまま移入されず, 夫々の国語に多神教的神話に連関して古来存在した総称的な名前 (例えば, theos, deus, god) が用いられた。Christian God は, 唯一でありしかも遍在であつて, 人類のものであると同時に夫々の民族と夫々の個人のものであるから, 自らにとつて最も親しみのある名称を純化してこれを用い神の名としたのは当然のことであつた。然しヨーロッパ人は Christianity 以前の神と Christian God とを区別しなくてはならなかつたから, 同じ名称を用いながらも, 例えば God, Deus, の如く大文字を語頭に用いた。polytheism に於ける神族には Zeus, Uranus, Gaia の如く夫々の proper name が存在すると同時に theos なる種的な common name が存在した。従つて theos, deus, god 等々は common names であり, 個々の神に共通な神的な特質を内包する概念記号としての語であつた。超越的で同時に遍在的な唯一神がヨーロッパに入つて来た時, それにどのような名前を用いるべきかはかなりの問題であつたと思われるが, 結局神的な特質を内包とする概念記号としての common name を Christ によつて啓示された絶対者に用いたことは自然なことであつた。

我々は主体的交りに於て, 相手を呼ぶ場合に二人称を用いる。三人称を用いない。言語主体にとつての proper name は主体的交りに於てその本来の特質をもつ。それは, 反省的概念的三人称としての客体的対象概念ではない。それは我に対する汝であり, 我と同じ地平にある主体であり他者なのである。personification は或る意味で主体化, 二人称化に接近するから, Nature, Mercy などが proper name に近いものとして感じられるのも理解される。God とは Christians にとつては他者として“汝”として迫つて来る絶対的主体であり, これは限定を超える存在である。従つて creature に対する creator であつて, 別に他の同類から区別する必要はなく, 唯一のものであるが, 無限の内包を有するものであり, the Lord, Eternity などとも呼ばれるのは, その属性を暗示する。従つて God は概念として無限の内包と唯一の外延を有すると同時に persona (位格) であつて, proper name というよりもむしろ包括的な普遍者としての persona に対する記号であるが, ある共通な群れを代表する

個体に与えられ、その属性を内包として形成された概念記号としての common name と異なる。然し Christians 以外の人々にとって God は the Christian god であつて、完全な common name である。又は大文字で God と綴る時、Zeus, Apollo の如き gods の中に並ぶものとして proper name ともなる。God なる文字を用うる場合も、その言語主体の意識によつて異つて来るのである。Christians にとっては、God は proper name でも common name でもなく、特別の category に入れるべき name であろう。

VII 結 び

以上、固有名詞の内包を手がかりにして、その特質をさぐるうとしたのである。ある語が proper name であるかどうかは、それが referent と一対一の対応をなす記号であつて、referent の有する属性を伝達せんとするものではないこと、従つて proper name は common name と異つて、概念の記号ではなく、一般の論理学書に於ける如く proper name を individual or singular concept の中に分類したり、Mill の proper name は内包がないという結論に反対する Sweet や Jespersen の如くその speciality の故に proper name に common name 以上に多くの内包を与えたりすることは共に不十分な考察と云えよう。

例えば次の二つの文例を考えよう。

He is John. ……………(1)

He is a teacher. ……………(2)

(1) は、He is called John. の意味で John は John という音の形又は文字を表すだけでそれ以外の何の意味もない。

(2) の a teacher はその referent の属性を伝達出来る語であり、その内包は convention によつて流通性を持ち辞典に於て一定の枠をもつ。

John と呼ばれる或る人物が歴史上有名であつて、それについて知ろうとする場合、John という名称は辞典ではなくて、事典にたよるべきである。即ち John そのものは語として、John の referent の属性を限定していない。それにはふれないのである。

Sweet は、New English Grammar p. 59に於て “Proper names have more meaning than common words through being more highly specialized. The mistake has arisen from confusing unmeaning with unconnected.” とのべ、proper name は unconnected だが meaning をもつとするがこの meaning は proper name の referent に直結するものであつて、proper name はその referent を示すだけでその属性を示そうと志向 (mean) するものではない。

proper name か common name かは、言語主体が、その音形式を単にある referent の記号として用いているか、又はその音形式に概念的な内包をもち込んで相手に伝達せんとしているかによつて定るのである。これは speech 又は parole に於ける個々の言語行為にもとづく判別である。然し language 又は langue に於ては、その音形式が伝達を約束されている一定の流通性を convention に於て獲得していない語は common name ではない。実際の言語活動の場に於ては、speech と language とは交り合つて働くものであるから、本来音形式だけのものである proper name が、speaker の個人的志向によつて様々な内包を附与されることはある。

There were days when Sophia was the old Sophia the forbidding, difficult Sophia.

上文に於ては、Sophia の referent が時間の過程に於て変化していることを示す文章である。然し Sophia と呼ばれる referent の本質は不変であることは依然として Sophia と呼ばれることによつて分る。時間的変化の中で本質的 identity は不易なことを認めている。

言語の世界は referent そのものの世界ではない。これは意識の世界と物それ自身の世界との関連に似ている。或る語はその referent から離れて association, analogy などによつてそれ自身の内包を増加していく。認識に於ては、referent そのものの属性はその概念記号としての語の内包に関連すると等しく、人間によつて形成された世界としての概念は referent の表現方法として、又その解釈と認識に於て、意識内の referent の image を形成していく。referent そのものと意識内にあるその image とは関連はあつても区別すべきものである。概念は必ずしも実在としての referent を持たない場合もある。抽象名詞はその例である。又小説に於ける如く proper names によつて架空の referents の創造がなされる例もある。

proper name の特質をあげれば、原理的に、概念の記号ではないということである。従つて概念としてのその内包の在否を論ずることも出来ない。proper name が概念の記号として用いられる場合は、すでに common name に移行したものと見るべきである。又 proper name から common name への移行の例があるからと云つて、proper name と common name との相違は量的なものであつて質的ではないと結論するのは速断である。proper name が既知の記号として言語主体間に流通する場合は、proper name が喚起する referent の image は、表象又は idea であつて、直観的のものである。これに反省と判断即ち抽象、捨象の作用が働いてはじめて concept が得られるのであつて、ここに common name が生ずる。proper name と referent との関係は直観的であり、common name と referent との関係は概念的間接的である。

proper name に adjective を附加する場合、proper name の喚起する referent の表象は限定されるが、それと同時にその image を分析的にし概念に接近させるようになる。proper name と referent との関係は一対一であつて、全面的に重なるものであるから、proper name は附加語的形容詞を元来必要としないのであり、装飾的であるか、同格的である。例えば Poor little Ben, Old Thomas, Mt. Fuji, etc. this England, that England に於ては England なる proper name に対して referent が二つ以上考えられているのであり、the England of Asia の如きものとは異り、England の referent の identity を認めた上でその時間的変転をフィルムの一コマ一コマの如く捉えているか、England の referent を異つた側面から捉えているのであつてここに表象的機能と概念的限定との一見不自然な結合が見られるのである。

proper name は referent の全く恣意的で私的な記号又は呼び名であつて、概念以前のものであり、又 convention に於て流通性を持ち辞典に見出される word とは云えないものである。

かかる proper name を words の一種として取扱い、又概念の一種として包括せんとする場合、無理が生じ、考察の上での困難がともなうのは当然であろう。この困難さは、言語の本質、概念の本質、それから words と referents が認識に於ては依存しながらも、互に独立した世界を形成するものであること、などの確認にもとずいてはじめて解決されるであろう。

“Connotation of Proper Nouns”

by

Katuo MOROZUMI

(Department of English Literature, Faculty of Liberal Arts and Science)

This essay falls into seven sections:—

- I Reality and Names
- II Common Names and Proper Names
- III Proper Names and Concepts
- IV J. S. Mill and Sweet-Jespersen
- V Expansion of the Denotation of Proper Names and their Transformation into Common Names
- VI Pseudo-Proper Names
- VII Conclusion